

16. シミュレーション教育の実際とデブリーファ어의活動

加古川東市民病院 看護部 矢田 愛子

【はじめに】

シミュレーション教育は、「実際の臨床場面を模擬的に再現して、その学習環境下で学習者が実際に経験し、それを仲間とともに振り返り、知識と技術を統合していくことから実践力を向上させる教育」¹⁾である。このシミュレーションを経験している学習者をつぶさに観察し、その後で行われるディスカッションで、学習者の振り返りと学びを、発問や質問に基づいて支援する役割をデブリーファ어とよぶ。

私は、阿部幸恵先生（おきなわクリニカルシミュレーションセンター副センター長、琉球大学医学部付属病院教授）の指導者育成コースに参加し、実際にシナリオ作成とデブリーファ어의演習を行った。そこでデモンストレーションとは全く違うものであること、目標設定や環境の重要性、学習者の「なるほど！」をひきだすデブリーフィングの難しさを体験した。

当院では、2012年度よりシミュレーション教育を導入し、新人教育の多重課題や医療安全研修、救急看護研修、ラダー別研修などで実施している。

今年度から各部署の分散教育にも導入し、よい評価を得たので、デブリーファ어としての活動を報告する。

【実際】

＜シミュレーション教育の流れ＞

- ①事前学習・・・学習者は事前学習を行ってからシミュレーション教育に臨む
- ②ブリーフィング・・・シミュレーションのシナリオを説明し、学習者と目標の共有を行う。学習者は、シミュレーションで使う機器などについても理解した上で臨む。
- ③シミュレーション
- ④デブリーフィング・・・シミュレーションの経験を目標に沿って振り返り、さらに学習を深めるために学習者同士が、主体的にディスカッションを行う。シミュレーションの時間の2～3倍をかけて行う。
- ⑤評価・・・指導や環境などの振り返り

＜5病棟の分散教育に参加＞

5病棟（循環器病棟）は毎月1回以上急変時のデモンストレーションを行っていた。

デモンストレーションは、技術の手順や急変時の対

応を指導者が実演し、学習者は目で見て覚えるといった「指導者→学習者」の一方向のものであり、体験するのも1回で終わるため、「傍観者」で終わる人がいるのが一般的である。5病棟のデモンストレーションも例外ではなく、事例や方法がマンネリ化しパターン化していた。受講者全員が参加でき、なおかつリーダークラスはメンバーへの確に指示がだせるという、5病棟の学習ニーズがあったため、5病棟の分散教育にシミュレーションを取り入れた。シミュレーション教育の流れに沿って説明する。

- ① 事前学習：10年目以上のリーダーナースの役割を担う看護師を対象に、急変時の対応やSBARについてなど学習者へ課題を提出
- ② ブリーフィング：目標は
「予測しながらの観察ができる」
「アセスメントができる」
「メンバーへの指示だしができる」
「SBARを用いて医師への報告ができる」
とし、声に出して読み上げてもらい意識してもらった。
- ③ シミュレーション：4人で1グループのシミュレーションを2グループ行った。心筋梗塞、心不全をもつ患者が夜勤帯にVTが出現するところからシミュレーションを開始とした。
- ④ デブリーフィング：ディスカッションしやすいように円形で座り、まず目標を再確認したあと、その目標を達成するために学習者が行った動きを全員で振り返った。学習者の意見や気づきを大切にし、その話し合いの中からリーダーとして役割分担を再確認させることを重視し、一方的な誘導とにならないように気をつけた。また、学習者の気づきや学びを書きとめ、整理するために板書を活用した。

「自分にはできない」という自己評価の低い学習者が、他者からのポジティブな評価を受けることで、自己効力感の向上に繋がり、デブリーフィングの中でも建設的な意見が聞かれるようになった。対象をリーダークラスという能力の高いスタッフにしており、デブリーフィングを行っていても本人たちの意見を基に内容が深まっていった。

【結果】

5病棟の学習者8名のアンケート結果から、80%が「客観的にメンバーの動きをみることができ指示が出せた」「回数を重ねるごとにレベルアップできた」というシミュレーションの強みというべき意見があり、月1回のデモンストレーション開催という「やらされ感」だったのが、「もう一度リーダー役をしたかった」と学習者が、主体的に学ぶ気持ちへと変化した。

【考察】

分散教育に導入したシミュレーションは、同じ病棟内の学習者同士であるため、メンバーの力量が測れる、組織内のルールに合わせて行える、ディスカッションが活発になるといった効果もみられた。

今までの分散教育では、突然の配役任命から始まり、背景や環境も十分把握できないままのデモンストレーション、そして振り返りは、急変対応ができたか、できないかの評価になり、学習者は緊張するだけで、達成感がないまま終了していた。しかし、評価ではなく思考・行動などを振り返り、知識と技術を統合し、目標達成に向けていくというデブリーフィングで、疲れを感じても、「またやりたい」「頭と体で理解できた」という気持ちがあまれ、学習への欲求を満たしてくれるものとなった。

デブリーフィアは、シミュレーションを単によかった、悪かったと評価したり、学習者が気づいたことをフィードバックするだけではない。環境やシナリオはできるだけ忠実に再現し、学習者が体験したことを振り返り、課題を見つけ、主体的に学習し実践力を向上していくように支援する「学習の促進者」とであると実感できた。

【終わりに】

デブリーフィング中は、常に目標を意識すること、行為を振り返るのではなく、行動を裏付ける知識、看護観、倫理観も振り返らせ、学習者が教訓を発見し、言語化できるようにすることが、デブリーフィアの役割である。

今後の課題は、臨床でシミュレーションの素材を見つけるセンスとやる気を引き出す支援力、デブリーフィングで議論を促す対話力を向上させ、自らも研鑽するとともに、デブリーフィア育成に貢献したい。

【引用・参考文献】

1) 阿部幸子：看護のためのシミュレーション教育はじめての一步ワークブック,第1版,株式会社日本看護協

